

田中秀介／咲くやこの花インタビューvol.40

田中秀介(たなか・しゅうすけ)【令和5年度 美術部門〔現代美術〕】



200 号のキャンパスに骨格標本等を描いた 大阪市立自然史博物館の展示が話題に

和歌山県生まれの田中さんは、絵画を学ぶため高校卒業後に大阪へ。2009 年に大阪芸術大学美術学科油画コース修了以降は、同年に Art Camp 2009 サントリー賞を受賞し、第 24 回ホルバイン・スカラシップ奨学生認定を受けました。2016 年にトーキョーワンダーウォール賞、2018 年に清須市第 9 回はるひ絵画トリエンナーレ準大賞を受賞するなど頭角を現します。

そして、2022 年には大阪市立自然史博物館の展示室内で個展を開催。骨格標本や鉱物、そして展示室そのものの風景を独自の視点で描き出し、博物館に新たな光を当てました。「絵画への徹底した信頼を感じさせる作品を作り続けており、各地で精力的に発表している。今後のさらなる飛躍が期待される」という受賞理由にもあるように、今、美術界において注目される存在の一人となっています。

取材・文／岩本和子

ハッとした物事を納得した形で自分の中に落とし込む

この度はおめでとうございます。まずは受賞のご感想を教えてください。

寝耳に水というか、賞をいただけたとは思っていなかったですね。嬉しさはもちろんですけれども、ち

よっと安心した思いというか。お世話になっている方がたくさんいるので、こういった賞は、わかりやすい形で示すことができますので、受賞はとても大きかったです。

和歌山県のご出身で、進学を機に大阪に来られました。大阪はどうですか。もうご自分の町になっていますか。



いや、まだですね。ようやくという感じですかね。ようやく、なんとなく、わかってきた感じですか。単純に方向音痴なので、方向がわかってきたっていうのも大きいですね。いまだ迷うのですが。

まず大阪美術専門学校に進学されました。

学校は楽しかったですね。大阪美術専門学校には現役の作家さん、いわゆるコマーシャルギャラリーに属している作家さんが先生だったり、様々な先生方の生き方を側で見させていただき、そこで「そうやって身を立たせているんだ」という学びはありました。

そして2年後に大阪芸大に転入されました。

単純に2年では何か足りないなと思ったんですよね。もうちょっと絵をやりたいなという思いもあって。大学にはどういった人がいて、どんな絵を描いているのか、そこでどう自分が鍛えられるのかとイメージしていききましたね。

専門学校の実践的な教えと、いわゆる体系的に美術を学べる大学と、二つの経験は大きいですね。特

に専門学校の先生方が「こういう生き方もあるよ」と示してくれたこと、学生時代にそれを知ることができたというのは大きいのではないのでしょうか。

大きいです。先生と距離が近い分、親身にしてくれて、怒ってもくれて。真剣な大人がいたのは大きかったですね。

今の油絵のスタイルですが、いつ頃からこのタッチなんですか？

身の回りのものをらくがきで描いたりというのは、小さい頃からしていて。反面、何か得体の知れないものを描くことも面白くて。たとえば、大学の時に描いた「餅ほり」…「餅ほり」ってわかりますかね？



餅まきのことですか？

はい、「餅ほり」と言っているのは僕だけかもしれないですけど(笑)、その「餅ほり」の絵をどれだけ劇的に描けるかと。劇的に描くということはイメージしないといけないので、そのイメージでもって描いていくんですね。大学の時はそうやって何か得体の知れない状況を、でも一瞬、自分たちの生活にあるような構造のものを描いていました。でも、イメージで描いていくことの弊害もあって。24、5 歳ぐらいの頃ですかね、一つの絵に木を描いたとするじゃないですか。そしたら別の絵でも似たような木を描いていたんですね。イメージなので割と固定化されてしまっ。絵を描くのは好きなのですが、面白いと思えないものを描き始めていたんですね。20 代前半まで専門学校や大学に入ることによって、どこか躍起になっていたところがあったので、改めて我に返るというか。それで、散歩とかをして、自分がハッとしたことを拾っていく、自分に必要なものを自分の必要のように描こうと思うようになりました。

そこから描く絵は変わりましたか。

自分の中ではあんまり変わってはないんですよ。前は「こういう絵で、こういうイメージを示したい」と思っていました。でも、それは、現実を見た中でのイメージなので、不思議に思ったり、ハッとしたものが自分の中で腑に落ちる形で描いていくということですね。

田中さんの絵にはファンタジーも感じていたのですが、今のお話を聞いて、私が感じたファンタジーは、そういう「イメージ」から来ているのかなと思いました。

それはあるかもしれないですね。僕が体感したものを描くには、その時感じたイメージに基づいて描く。ということは、ちょっと現実から離れていく。現実だけど、現実から離れていくというのはありますね。



クローズアップされた部分にダイナミズムも感じるのですが、田中さんは絵を描く時、世界がどういふうに見えているのか不思議でした。

例えば夜の信号があるとするじゃないですか。赤い色が灯っていて、うわ、綺麗だと思ってじっと見る。写真も撮っておく。その後、あの赤色を描きたいと思っても、写真では正確に追えないんですよ。確かにその状況は明確に残されているけれども、あの時私がハッとした状況にはなっていないので。だから、その光景を自分の中で解釈していく。その解釈の過程で、「もっと大きく見えていたんじゃないか」とか、「もっとこういう赤色やったんじゃないか」とか、「人が歩いていたから信号もよりよく見えたんじゃないか」となったら人も出てくるし、とか。そうやって僕が目指す解釈に準じて絵を描いていく感じです。

「腑に落ちる」というご発言もありましたが、その状況などを自分の中にちゃんと落とし込みたい。

落とし込みたいですね、できれば。理解するとか、解釈。自分の中で腑に落ちる方法というか、折り合いをつける。絵を描くことは、僕にとって一番単純なもので、一番解決しやすい手段です。

大阪市自然史博物館の展示は喜ばしくも過酷な経験

2022 年に大阪市自然史博物館で展示をされました。その時も骨格標本や鉱物、化石に近づいたり離れたたりしながら、200 号のキャンパスという大きい絵を 12 枚描かれました。大きい絵は過去にも描いたことはあったんですか？

いや、ないですね。あの時は本当に過酷だし、喜ばしい状況というか。そんな大きい絵を描く機会もそうないんですよ。

どういう経緯で展示が決定したのでしょうか？

私の家の近くに大阪市立自然史博物館があって、よく行ってたんですよ。で、2019 年の個展の時に、マンモスの標本を 200 号で 1 枚、勝手に描いたんですよ。それをあるギャラリーで発表して、その後、和歌山県立近代美術館で個展をやることになって、その絵を出しました。その時、和歌山の学芸員さんと自然史博物館の学芸員さんがつながっていて、「標本を描かれた大きい絵がありますよ」と自然史博物館の学芸員にお話してくれて、それから三者で企画を進めたという感じでした。



そういう経緯だったんですね。

絵を展示するにしても、僕は自然史博物館のお客さんとして絵を見て驚きたかったのも、となると壁の上の方にバーンとあったら驚くだろうなと、そんなことを考えました。驚くためには何枚必要かとか

話し合いをして、1年ぐらいかけて制作しました。キャンバス、これは支持体というのですが、支持体を作るのもすごく大変なんです。布を買ってきて200号の木枠に貼って、その表面に塗る塗料を作って、そして塗ってという作業を12回しないといけないから。表面の張り具合とか、いろんな実験も必要で。そういうことも込みで1年という感じですかね。

田中さんは、絵のイメージが決まって、いざ描き出してから速い方ですか。

多分、速いと思いますね。できるだけホットな状態がいいというか。でも、自然史博物館の時はそれがなかなか難しかったですね。自分がそこに何十回も通って見ていくうちに、その光景が当然のものになっていくんですよね。でも、飽きてきた上で、また見える光景もあったり…。単純にキャンバスが大きいから描くのは大変だろうなという思いもありましたが、でも描ける機会があったのは良かったですね。

その制作を通して、絵に対して何か変化はありましたか？

それもね、わからないですね。絶対にあったと思います。あるんですけど、心の中でどう作用しているかというのは難しいですね。それで余裕が出たとかもないし、勝ち誇る気持ちとかもないし、まあまあやったなあっていう感じですね。あとは、やっぱり描くと技術は変化する。上手くなることがいいのか悪いのかはわからないけども、技術力が変化していくから、それは経験としては大きいし、絵を描く時間配分なんかも本当に経験になりましたね。



咲くやこの花賞を贈りたい「安心できる場所」とは？

最後に、田中さんが大阪市に「咲くやこの花賞」を贈るとしたら、何に贈りますか。

喫茶文化ですかね。喫茶店は本当に面白くて、よく絵にも出てくるんですけども、その佇まいが割と変わってなかったりするんですよ、何十年と。基本、コーヒーだけ淹れて、それに準ずる軽食で何十年とやっていて。そこをいろんな人が行き来している状況がすごく好きですね。

喫茶店ではどういうふうにお過ごしですか？

絵のことを考えていたり、全く別のことを考えていたり…。絵にまつわること、たとえばテキストとかを書くこともあるし、最高ですね。お酒を飲める喫茶店もありますし。

喫茶店のようなちょっとしたざわめきは、逆に集中できますね。

心地いいですね。喫茶店に行ったら、一瞬、世間と同化しているような気になれるんじゃないですかね。安心感というか、世の中にはいろんな人がいるんやなと思える。そういう意味でも喫茶店は好きですね。

